

4月から指定

がんゲノム医療連携病院



遺伝子異常別に最適な治療を

「がんゲノム外来」の体制整備に向けて入念な打ち合わせを行うスタッフ

今年4月、厚生労働省が群馬大医学部附属病院を「がんゲノム医療連携病院」に指定した。県内では県立がんセンターに次いで2例目。同院では6月下旬から院内で治療するがん患者を対象に「がんゲノム外来」をスタート。がんゲノム医療中核拠点病院の国立がん研究センター中央病院（東京）と連携し、現状では有効な治療法がないがん患者に対して最適な治療を探る。

臓器別から個別化へ

がんは、遺伝子の異常が蓄積することで発症する。ゲノムとは、遺伝情報の固まりのことで、がんゲノム医療は、患者のがんの原因遺伝子を特定し、より効果が高い最適な薬を見つける。これまでの臓器別の治療から、患者一人一人の遺伝子異常に基づく個別化医療となる。

血液がんを除く固形がん、治療効果が認められている標準治療を終えた患者、標準治療のない希少がんや原発不明がんの患者が対象。がん組織の遺伝子を一度に100種類以上調べる「がん遺伝子パネル検査」を行う。



がんゲノム医療について語る 塚本診療教授

「NCCオンコパネル」と「FOUNDATIONワン」の2種類の検査があり、調べられる遺伝子数や血液検体も必要かどうかなどが異なる。ともに費用は56万円だが、保険適用で自己負担は1～3割、高額療養費制度を利用すれば、費用はさらに抑えられる。

解析は外部の検査機関が実施。検査結果をもとに、連携する国立がん研究センター中央病院と合同でエキスパートパネル（専門家会議）を開き、テレビ会議で治療方針を協議する。

遺伝情報で新薬開発

群馬大医学部附属病院では、腫瘍センターを中心に、複数の部署が連携してがんゲノム外来を運営する。検査部、治験・臨床試験に関する情報を把握する臨床試験部、新たな治療法に関わる先端医療開発センター、がんゲノム医療の相談窓口となる患者支援センターなどの医師、看護師、事務員らが週に1度ミーティングを開き、体制を整備してきた。院内で治療する患者への診察が始まっている。

がん遺伝子パネル検査で、がんになりやすい「遺伝性腫瘍」と分かる場合があるため、事前に結果の開示を希望するかを確認した上で患者に伝える。必要に応じて遺伝子診療部を紹介し、患者や家族

がんゲノム外来の流れ

※現在、群馬大医学部附属病院では院内で治療するがん患者のみ対象

- 1 診察予約**
○主治医が検査を申し込み、予約を取る
1週間後
- 1回目診察**
○医師・看護師が、がん遺伝子パネル検査の内容や費用を説明
○検査に提出する検体の準備
1週間後
- 2回目診察**
○がん遺伝子パネル検査の希望を再確認し、検査の同意書に署名
○検査の種類によって採血
○検査部へ検査を依頼。外部の検査機関が遺伝子解析
3～4週間
- エキスパートパネル開催**
○国立がん研究センター中央病院の専門家らと治療方針を協議
1週間後
- 3回目診察**
○検査結果を説明

をサポートする。

保険適用薬や新薬開発に向けた治験・臨床試験の薬剤にたどり着けるのは、検査を受けた患者のうち10%前後と低い。また、治験・臨床試験は、国立がん研究センターなどで行われているため、本県から通う負担が出てくる課題もある。

一方、検査した患者の遺伝子異常情報と臨床情報は、国立がん研究センター内のがんゲノム情報管理センター（C-CAT）に集約。蓄積された情報をもとに、新たな診療、治療薬の開発につなげる。

腫瘍センターの塚本憲史診療教授は「がんの個別化医療が始まっている。確率は高くないが、効果の高い薬が見つかる可能性もあるため、標準治療を終えても希望を持ってほしい」と呼び掛けている。

理念「大学病院としての使命を全うし、国民の健康と生活を守る」

基本方針

安全・納得・信頼の医療を提供する。
次代を担う人間性豊かな医療人を育成する。
明日の医療を創造し、国際社会に貢献する。
医療連携を推進し、地域医療再生の拠点となる。



群馬大学医学部附属病院
前橋市昭和町3-39-15 TEL.027-220-7111(代表)
<https://hospital.med.gunma-u.ac.jp/>